

# 「英文法・英語表現指導法研究会@東京」実施レポート

日時	2013年10月12日13時30分～17時45分	
会場	フクラシア浜松町	
<table border="1"><tr><td>内容の報告</td></tr></table> <ul style="list-style-type: none"><li>● 概要・進行<ul style="list-style-type: none"><li>13:30 「コミュニケーションにつながる英文法指導」 (立命館大学 山岡憲史教授)</li><li>14:45 「Departure English Expression I の指導実践例」 (千葉県立印旛明誠高等学校教諭 福水勝利先生)</li><li>16:00 「生徒に必要な英語の基礎力をどのように育成するべきか」 (立命館慶祥中学校・高等学校教諭 今井康人先生)</li></ul></li></ul> <p>▼「コミュニケーションにつながる英文法指導」</p> <p style="text-align: right;">(立命館大学 山岡憲史教授)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ コミュニケーション能力の育成にとって、文法学習は不可欠であり、文法を習得し使うことができなければ、コミュニケーション能力は育たない。文法は文法、リスニングはリスニング、のように切り分けることなく、文法を「使うもの」として学び、実際に使うことが重要。</li><li>・ 従来の文法指導では、教えることの量が多すぎて定着しない、文法問題は解けても文法を使うことができない、文法とコミュニケーションとを切り離して学習してしまう、といった問題点があった。「英語表現」の指導においては、文法の知識を一気に教え込もうとしない、学んだ文法規則を使う言語活動を行う、話すことと書くことが結びついた活動を行う、などが重要となる。</li><li>・ 指導例<ul style="list-style-type: none"><li>(A) be going to と will はどう違うか、次の例で考えてみてください。<ul style="list-style-type: none"><li>1) Tom: Mom, there aren't any milk in the refrigerator. Mom: I know. I'm going to get some today.</li><li>2) Tom: Mom, there aren't any milk in the refrigerator. Mom: Really? I'll get some today. (Practical English Grammar 改)</li></ul></li><li>(B)<ul style="list-style-type: none"><li>1) 自分の好きな歌手や俳優の履歴書を完成させる。</li><li>2) 履歴書を書いた生徒と異なる生徒に、履歴書を参考に過去完了の文を沢山作らせる。</li><li>3) 他の生徒に書かせたものに、さらに意見を書かせる。</li></ul></li></ul></li></ul> <p style="text-align: center;"><b>【福水先生の講演レポートは次のページに続きます】</b></p>		内容の報告
内容の報告		

## ▼「Departure English Expression I の指導実践例」

(千葉県立印旛明誠高等学校 教諭 福水勝利先生)

- ・ 印旛明誠高等学校は公立校であり、生徒の学力も個人差が大きい環境だが、Departure を用いた英語表現の授業は十分に実施可能である。
- ・ 無理なく知識を定着させるため、1年で20課構成となっている教科書の半分を終えることができればよいと考え、1課に対して6コマ程度の授業を行う。教科書の内容は飛ばすことなく、基本的に全て扱う。文法事項は長々と説明しない、問題の答え合わせ後は声出しをする、Challenge はペアで取り組ませるなど、生徒を飽きさせないように工夫をする。
- ・ 英語を理解し、体で覚えるために、音読を重視する。音読方法は、基本的な Repeat after me. 以外にも、一度読んだあと教科書から顔を上げて読ませる Read & Look Up, Shadowing, 「何秒に何回読む」というような条件をつけて読ませるスピード読み、場面を設定して登場人物になりきって読ませるなりきり読みなど、様々な手法を用意する。
- ・ 小テストを作成し、音読などによって英文が身についているかを確認する。小テストも単純な穴埋め問題にせず、英文全体を書かせるような問題になるよう工夫する(英文の上にテープを貼るなどして作成)。

**【今井先生の講演レポートは次のページに続きます】**

## ▼「生徒に必要な英語の基礎力をどのように育成すべきか」

(立命館慶祥中学校・高等学校 教諭 今井康人先生)

- ・ 英語の学びには、音や語彙、文法などを理解する「構成力」と、学んだものを発信する「運用力」の 2 つの側面がある。構成力を育成するには、学んだことを理解した後に、英語を内在化することが重要となる。運用力を育成するには、リテリングやペアワーク、ディスカッションなどで実際に使う場面を増やすことが重要である。
- ・ 構成力育成と運用力育成のどちらかにのみ偏るのではなく、テキストの内容をしっかりと理解し、内在化することによって英語を自動化し、構成力を鍛え、実際に英語を使う授業が理想となる。高 1 における授業内での構成力と運用力の比率は 8 : 2 が理想と考える。
- ・ **Departure** は、流れに沿って進めていくことで、英文の理解から英語での表現ができるようになるように構成されている。そこで、英語を内在化し、自動化するために、さらに様々な工夫を取り入れる。
  - 例1) 教科書の解説後、生徒が書いた英文は全てネイティブがチェックする。生徒はその英文を覚え、次の授業で発表する(苦手な生徒は見ながらも可とする)。
  - 例2) 小テストは定期的に行う。単語、**Zestar** の暗唱例文集については、毎週テストを行う。ただし、出題方法は生徒のレベルに合わせて調節する必要がある。
  - 例3) 複数回の練習ができるよう、**Zestar** ワークは書き込まず、別冊のノートで取り組ませる。
  - 例4) 週に 1 回、**Zestar** を読んでいて気づいたことをまとめる「気づきノート」を提出させる。その中に感想が書いてあった場合は、必ず返信をする。
- ・ テストにおいても、構成力を問う問題と運用力を問う問題を含むように作成する。構成力を問う場合は、エラーコレクション、与えられた語順を変えずに文の形を変えるグラマリング、英作文が、運用力を問う場合は **Q & A**、シチュエーション問題、ビジュアル問題などが有効である。